
天に輝く日輪の如く

まどろみ猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天に輝く日輪の如く

【Zコード】

N4170N

【作者名】

まじろみ猫

【あらすじ】

時は戦国、処は安芸の国。下級武士の娘である小菊は、突然の事態に戸惑うことしかできなかつた…。安芸の國のみならず、中国地方を統べる冷酷なる策略家・毛利元就からのお呼び出し。拒否などできるわけもなく、殺される覚悟を決めた小菊は、高松城へ連れて行かれる…。

日輪の申し子と、小さな菊の花のよつな娘。他者を拒み孤独に生きる青年と、他者の幸せを願う心優しい娘。

これは、そんな二人の、目には見えない『愛』の物語…。

小わな菊の花（前書き）

はじめまして、まじろみ猫と申します。小説を書くのが趣味です。
慣れないパソコンで、人生初の投稿です。

読んで下さる方へ。私は、少しでも上達したいので、できれば感想やアドバイスをお願いします。厳しいお言葉も、自らの糧にしたいと思つております。…ですが、登場人物への批判はおやめください。

この作品は、戦国BASARAの一次創作です。毛利元就様に、幸せになつていただきたいと書きました。しかし、元就様のキャラが崩壊しておりますので、無理と感じた方はお逃げください。
以上、わかつたよという方はお読みください。

小さな菊の花

「…小菊！小菊はあるか！」

屋敷に響く、父上の声。

縁側で、美しく咲き誇る桜を眺めていた私は、驚いた。

「父上！小菊は、ここにあります！」

普段溫和で滅多に大声など出さない父上が、あのように必死に私を呼ぶなんて、何事かあつたに違いない。

「小菊！…うう」

「ち、父上！？」

駆け寄つてこられた父上は私を見るなり、泣きだしてしまわれた。

「どうされたのですか、父上？」

尋ねても、溢れる涙を拭いもせずに男泣きにくれる父上。

…父上の涙を見たのは、あの日以来。母上が、亡くなつた日。

困惑と、不安。それらが胸中に、じわじわと広がつていく。

「…」、「じきくを…そなた、を…」

「?私が、どうかしたのですか?」

しゃくりあげながらも、父上は言葉を紡ぎだす。

「元就様が、小菊を、た、高松城に、連れてこい、と…」

一瞬、目の前が真つ暗になつた。

「わ、私を、ですか?この中国地方を統べていらつしやる毛利元就様が、そうおつしやられたのですか?」

有り得ない。何かの、間違いだ。そう、思いたいのに。

「高松城から、使いが来た…元就様が、直々の文を…」

父上が握りしめて、くしゃくしゃになつてしまつた文。

震える手で、受け取る。とても綺麗で読みやすい字が、目に入る。

『貴様の娘を、我が居城である高松城へ連れてこい。従わなければ、貴様の家は取り潰す』

記されている名は、毛利元就。安芸の国の君主にして、中国地方

を統治する、冷酷なる策略家。

「…一体、どういうことでしょう…」

下級武士の娘である私と、元就様に面識などない。なのに、どうして。

「…儂にも、わ、わっぱり、わからん…。あのお方が考えておられる」となど…」

そう言つと、父上は再び号泣し始めた。

私は、ただ茫然とすることしかできない。

暖かい風が吹いて、庭の桜の花が、宙を舞つた…。

道中、お迎えの輿の中で、私はほんやりと考えていた。

お城に着いたら、どうなるのだろうか。殺されるのかもしれない。

「…理由くらい、教えてくださるかしら…」

四角く切り取られた、青空。香つてくる、花の、優しい香り。

今日が見納めになるかもしれない世界は美しく、輝いて見えた。

片田舎の下級武士の屋敷と、国主のお城では、比較することがまず間違つている。

「…すごいです…」

輿から降りて、広い広い部屋に案内される。襖も屏風も、決して派手ではないが、一目で質の良さがわかつた。

一番良い着物を着てきたが、このお城の女中さんのほうが、良い着物を着ているかもしれない。

世界が、違うのだ。しみじみと、そう思つた。

広い部屋で、一人座している間、ずっと父上のことを考えていた。母上に先立たれ、後妻を娶ることなく、ただ私の成長を楽しみにして、不器用な愛情を注いでくれた父上。

女の身でありながら、学ぶことを好んだ私を、笑顔で褒めてくれた父上。

木に登つて降りられなくなつた私を、助けてくれた父上。

お城からお迎えが来たときも、泣いていた父上。

『儂が泣くのは、そなたが嫁ぐときと思つておつたのに…』

何も、言えなかつた。無事で帰つてまいりますなどと、果たせるかわからぬ約束は、できなかつた。

生きるか死ぬか。私の命は、元就様の掌の上。

一度と、会えないかもしれない。…嗚呼。

「…別れの言葉も、感謝の言葉も、言えなかつた…」

後悔、している。何も伝えられなかつたことを。

そうして、私は独り泣き始めた。

襖が、静かに開かれた。

部屋に入ってきたのは、一人の年若い男性。

私は慌てて涙を拭い、顔を上げた。

「…………」

無言で、男性は私を見つめている。無表情で。

(「…この方は一体どなたなのでしょう?…ずいぶん細身で、お顔が整つていらつしゃる…ああ、なんだか視線が痛くて、整つておられるから無表情なのが余計に怖いです…」)

突然の男性の登場に、混乱した私の口をついて出た言葉は、

「あの、その…ここにちは…」

しどろもどろな、挨拶だった。

「…………」

男性は無表情なまま、私の前に立つた。

(…お、怒らせてしまったのでしょうか!…なんだか、眉間におしわができているような…)

「…………そなたが、小菊か?」

広い部屋に、静かに響いた男性の声は、氷のように冷たかつた。耳を疑うほど冷たいその声に、背が震つた。

「は、はい…私が、小菊ですが…。あの、あなた様の、お名前は…

？」

見上げた男性の口が、ゆっくりと開かれる。
「我が名は、毛利元就。日輪の申し子なり」

小さな菊の花（後書き）

…「」の作品を、読んで下さった方はいらっしゃるのでしょうか？
他の方々が投稿された作品を読んで、ますます自信を失くす私です。
読むのと書くのでは大違い…でも書きたい。そんな私のことを
馬鹿だと思われた方はいらっしゃるでしょうが、それでも私は書き
続けます。

投稿は、時間が許す限り頑張ります。小説を読むのと書くのを至
福とする私ですが、仕事もありますので不定期となってしまうでし
ょう。それでも…読んで下さる方がおられたら…嬉しいです。

最後に。読んで下さって、ありがとうございました。

記憶の中の画面を追つ（前書き）

ひらや、私の書いた作品を読んでくれた方がいらっしゃったようですね。ありがとうございます！これからも頑張りますので、よろしければご覧になつてください。

…今日は元就様視点です。ここまで、キャラ崩壊もたいしたことありません。この話以降の元就様は、暴走されます。

記憶の中の面影を追う

私は、安芸の国を治める毛利元就。

毛利の御家を守るのが、我的役目。為さねばならぬこと。

そのためならばと、人の心を殺し、この激しき動乱の時代を生き抜くため、面を被つた。

我にあるものは、毛利の家と、それを守るという重責と、天に輝く日輪のみ。

…それでよいのだ。あの、四国の鬼のよつになど、我は生きられぬ。

誰にも、我は理解できぬ。仕方のないことだ。

所詮は我も、駒の一つでしかないのだ…。

各地の動きに気を払い、政務をこなし、日輪を崇める…。

我に、休息などない。気を抜くことなど、あつてはならない。

謀反によつて織田は滅び、霸王・豊臣秀吉が台頭してきた。あの大猿の理想と、それを為さんとするために手にした軍事力を考慮すれば、誰でも予想できることではあるが。

…我は、毛利の家の繁栄と、中国地方が安泰ならば、それ以外はどうでもよい。

城の天守から、輿がやつてくるのが見えた。

あの輿の中に、あやつがいる…。

ざわと、心が騒いだ。…だが、不快ではない。

「…礼を、せねばならぬからな」

あやつは、憶えておるだろ？

城の一室。中央で一人座しているあやつの姿は、驚くほど小さく見えた。

…まあ、我的表情は、変わらず無表情なのだが。

我が部屋に入ってきたのに気付いて、あやつが顔を上げた。

…我的鼓動が、少し早まつた気がする。

切り揃えられた黒髪は濡れたように艶やかで、肌は白く、人形のようになじみ整つた顔立ちをしていた。

実際、袖を動かさなければ、本当に人形が安置してあるかのよう見えただろう。

長い睫毛に縁どられた、大きな漆黒の瞳に、我が映つていた。

「…………」
言おうと思っていた言葉が、出てこない。座していた者は、我的記憶の中のあやつとは、もはや別の者だつた。

我が何も言わぬので、困惑したように視線を揺らしていた娘の、薄桃色の唇が動く。

「あの、その…こんなにちは…」

声は、鈴が転がるかのように、澄んでいた。

「…………」

どうやら、我がこの城の城主である毛利元就だと氣付いておらぬようだ。もしくは、混乱しておるのか…。

無言のまま、我は娘の前に立つ。

…近くで見ても、やはり小さい。娘の中でも、小柄なほうだろう。作り物のような娘。我はふと、娘の頬に涙の跡があるのに気が付いた。先程袖を動かしていたのは、流していく涙を拭つていたのだろうか？

なぜ、泣いていたのか。我には、解らぬ。

…否。我に理解できぬことなど、あるはずがない。

「…………そなたが、小菊か？」

できるだけ、穏やかな声で問う。下級武士の娘とはいえ、幼き日の我を助けてくれた恩人なのだ。

「は、はい…私が、小菊ですが…。あの、あなた様の、お名前は…

？」

を見上げる娘の瞳には、怯えの色があった。見慣れた、怯えた色。しかし、我が駒どもとはどこか違う。

数瞬で、合点がいった。この娘は、冷酷と称される毛利元就ではなく、突然現れた見知らぬ男に怯えておるのであるのだ。

さて、名を尋ねられて答えぬわけにはいくまい。この小さな娘が、我が名を聞いて畏縮することは確実だが。

「我が名は、毛利元就。口輪の申し子なり」

記憶の中の画影を追つ（後書き）

… 実を言いますと、私は控えめで健気な女の子が大好きなのです。小菊ちゃんは、私の好みの女の子です。こんな優しい子が、元就様の御心を癒してくれたらという願望が、はつきりと文字に表れます。

読んでくださった方へ、心よりお礼申し上げます。感想、アドバイスお待ちしておりますが、登場人物に対する批判だけはおやめください。

次話も、数日内に投稿してみせますので、読んでいただければ幸いです。

ある日の祇将達（前書き）

今回は西海の鬼・長曾我部元親さんと、空氣の風来坊である前田慶次さんが初登場です。アーキは四国に、慶次はふらふらしています。

さて、上達したいとのたまつた私ですが、書くにあたり戦国時代の生活様式や時代背景などを調べていません。あれ?おかしいなと感じられると思います。言い訳はしませんが、本当にごめんなさい。私にあるのは、書きたいといつ思いと元就様の幸せだけです。それでもいいよとこの方は、どうぞお読みください!

ある日の武将達

「…もみじまんじゅうってのは、うめえが甘すぎんぜ」
安芸の国の土産物の代名詞であるもみじまんじゅうを嚥下して、
俺は呟いた。

毛利の野郎が治める安芸。採りに行つたかわいい子分共が送つて
きたのは、当然、もみじまんじゅうだけではない。

「…何々…」

すずつと熱い茶をすすり、報告書を読み始める。

『アニキイー！お元気ですか！？俺達は元気にしてます！中国は毛利
のおかげで平穏ですが、やっぱり俺達はアニキがいいっす！ああ、
またアニキと一緒に海にでてえな…』

お世辞にも読みやすいとはいえない字で、子分共は中国で起つ
た出来事と、俺への想いを書き綴つている。

「…なんだか、報告書つて感じじゃねえな。まあ、あいつらひし
ぜ」

苦笑する。海の荒くれには、平穏な毛利の御膝元は、刺激が少な
くて物足りないのだろう。

『…でも、俺達の動きがアニキの役に立つんなら、俺達頑張ります
ぜ！あ、そういうえば、妙な噂を聞いたんですけど…』

妙な噂？湯呑を置き、真剣な顔で読み進める。

『ほんとかどうか、まだわからないんですけど、毛利の野郎、城に女
を一人囮つてるつて噂です！もう、俺達たまげちまいました！だつ
て、あの毛利の野郎がですぜ！？』

「毛利に女あ！？嘘だろ、おい！？」

叫んでから、俺は顎に手を当てて考え始めた。

(…いやいや、それは嘘だ。あの毛利が…あのオクラが、女に興
味を示したなんて聞いたことねえぞ。なんてつたつて、「私は日輪
と結婚する！」とかぶつこんだことぬかしそうな、あの毛利だから

な…。けど、あの野郎も男だからな。…ほつせえし、女みてえに綺麗な顔してやがるが）

気になる。ものすゞく気になる。正直、勢力を拡大している豊田の猿なんかよりも、いつちのほうがはるかに気になる。

「…おもしれえじゃねえか」

自然と、口の端が吊り上がる。何度も言つが、あのオクラがだぜ！？「ちょっと、拝みにいってくるとすつか！」

もう、なんて言えばいいのか。…楽しみすぎるぜ！…

「…ん？今、西のほうから恋の匂いがしたよつな…」

京の都。桜の木の下で一眠りしていた前田慶次は、目を瞬かせながら起き上った。

「キイー！キイー！」

相棒の夢吉が、ぴょんぴょんと飛び跳ねる。

「どうした、夢吉？…もしかして、お前も恋の匂いを嗅ぎ取つたのか？」

「キキイツ！」

夢吉は元氣よく答え、西の方を向く。

「キキツ！キキイツ！」

行こう、行こう…そう、夢吉は言つていた。

「うーん…いいねいいね…一体、誰の恋が見つかるだらうね」

超刀を担ぎ、夢吉を肩にのつけて、ゆっくりと歩み出す。

「元親のところにも、寄らせてもらおうつか！」

達者で暮らしているであつて、友の顔を思い出しながら、慶次は日ノ本の西を手指すのであつた…。

「キキツ」

（訳：いつまでも他人の色恋に首突つこんでないで、そろそろこゝ人見つけたら…）

ある日の祇将達（後書き）

アニキの口調は、なかなか難しいです。というか、小菊ちゃんの口調もあまり定まっていません。…丁寧語と敬語は、違うのです。図書館で、本を探したのですが、なぜか見つからず、突っ走りました。

構想はあるのですが、書いたらものすごく長くなってしまいます。お付き合いいただけたら、と…願っております。

私の前書きと後書き、長いでしょうか？読みにくいでしょうか？ 読んで下さった方へ。ありがとうございます！

せわぬ望み（前書き）

…本当に、パソコンって難しいですね。サイト？HP？を作つて、書いた作品を載せたいなどと考えているのですが、まつたくやり方がわかりません。あ、でも初心者がそんな真似すると危険でしょうから、やつぱりやめたほうがいいんでしょうね。

今回は小菊ちゃん視点と元就様視点です。どうぞ、お読みください。

叶わぬ望み

頭の中が真っ白になつた。冗談ではなく。

(え？このお方が元就様？お若いとはお聞きしていたけれど、私より幾つか歳が上なだけなんて…。つああ！私、中国地方の支配者たるお方に『こんにちは』なんて気安く挨拶してしまいました！なんて無礼なことを…！)

「……あ、あの、元就様…」

謝罪しなくては。そう思い、やうじょひとすらのひ、緊張して上手く言葉が出てきそうにない。

冷や汗が流れ、口の中がからからに乾いていく。

(ううつ！な、なんだか頭がくらくらしてきました…)

「…何か、望みはあるか？」

あまりの緊張に意識が遠のきかけた私に、元就様がお言葉をかけてくださいました。

「の、望み…ですか…？」

予想だにしないお言葉に、私は戸惑つた。

「そうだ。そなたの望みを、我が一つ叶えてやひひ！」

申してみよと、促される。片膝をつき、私のような者と視線を合わされた元就様は、面を被つたかのような無表情。

帰りたい。生まれ育つた屋敷に。父上の、元に。

望みは、ただそれだけだったのに。その、はずだったのに。

「…笑つて、くださいませんか？」

…まつたくもつて、この娘には驚かされた。この我が、だ。
着物、簪、宝玉、金子、父親の昇格、領地拝領。大方、それらを望むであろうと思っていたが、娘の望みは我の想定を超えるものだつた。

「…笑つて、くださいませんか？」

おずおずと、娘は言つた。敵兵はもちろん、家臣や兵士達すら恐れ、ろくに会わせようとしている、我の凍てついた眼を、真っ直ぐに、見て。

「…なぜだ？」

想定外の答え。その、真意はなんだ？

我が笑つて、そなたが得することなど、何一つとしてあるまい？

「…元就様、お会いしてから一度も感情を表されなかつたものですから、その…」

俯き、ただでさえ小さい身体をますます縮めて、囁くように娘は言った。

「…笑まれたお顔を、拝見したいと…思い、まして…」

俯いてしまつたので、どのよつた表情をしてあるのかわからぬ。

…我はといえば、相も変わらぬ無表情。笑むのが必要であるなら、どんな時だとて笑つてみせよう。…が、

「…我は、心から笑むことはできぬ。…心など、持ち合わせてはおらぬゆえ」

娘が、驚いたように我を見つめてくる。

毛利を守るという存在意義のため、我は心を凍りつかせた。ゆえに、笑むときの我の心には、一部の喜びも嬉しさも楽しさもない。ただ、我の氷の面が、笑みを形作るのみ。…それでいいのだ。笑みなど…。

「…そんなこと、ないですよ」

娘の、優しく穏やかな声。

「元就様、今一瞬だけ、悲しそうでした。感情のある人ならば、笑うこともできるはずです」

大丈夫ですよ。そう言つて、娘は微笑んだ。

ああ。…やはり、この娘はあやつなのだ。

幼き我を、迫りくる闇に怯える我を、救つたときと同じ。変わらぬ笑顔。変わらぬ優しさ。

…変わつたのは、変わつてしまつたのは、我の方なのだ。

叶わぬ望み（後書き）

…う…感想が評価がほしいです。どうか、お願ひします。
他のジャンル（ポケットモンスター やゲーム）でも投稿したいと思つておりますので、お見かけになられたらぜひご覧になつてください！

一応、自分で考えた作品も書いて投稿する予定です。
ありがとうございました！よろしければ次回も、お願ひします！

申し子と菊の花（前書き）

小菊ちゃんが、高松城で暮らしへはじめました。お城の人達は、あんな幼い子（年齢は十七歳です）を、元就様はどうするのだろうと思っています。もちろん、元就様は駒に事細かく事情を説明したりはしません。ただ客人としてもてなせと命じただけです。

それでは、お読みください。

申し子と菊の花

「元就様は、結局、私を呼び寄せた訳を教えてくださいなかつた。お気に障つたかもしれない。あんなこと、言つべきではなかつたのかもしれない。

でも、心などないとおっしゃつた元就様は、本当に悲しげだつた。それは、ほんの一瞬で、すぐかき消されてしまつたけれど。

「冷酷な方、なのかしら?」

話に聞いていた方とは、どこか違うような気がした。

与えられた部屋で、一人考える。疑問は山のようにあるのに、私にはそれらを解決するのに必要な、情報が不足している。

「それにしても、どうして私を…」

元就様のお人柄、これから高松城での生活、父上が今頃どうしているかなどなど、思うことは多々あれど、一番の疑問はやはりそれだつた。

「…わからないことばかりです…」

ため息をつくことしかできない、私だつた。

娘：小菊が城に来て、数日経つた。他愛のない話をするだけだが、不思議と私はそれを楽しんである。

どうやら小菊は、我と初対面だと思っておるらしい。我としても、自分より年下の女子に助けられたことなど、「口の口からは言いたくはない。言いたくはないのだが…。

礼は、せねばなるまい。そう考へ、望みを訊いたといふに。まさか、我の笑顔とは…。計算してないぞ！

晴れ渡る空を見上げる。今日も、田輪は美しく輝いており、平穏そのもの。素晴らしい日々である。

「…感情、心…」

田輪を慕めるとき、胸の辺りが暖かくなる。

駒がしぐじつたとき、苛立つ。

必要ないと、邪魔なだけだと、凍らせ捨て去つたはずのもの。まだ、我の中に残つてゐるのだろうか？

残つてゐるとすれば…我は、それを…。

消さねば、なるまい。

全ては…毛利の、為に。

「…書物が、たくさん…！」

一室にあるのは、文机と、棚にきちんと収納された大量の書物。「いつでも、好きな時に読むとよい。我が許可する」こんなにもたくさんの書物を所有しておられるとは…流石、智将です元就様！

「ありがとうございます元就様！…とても嬉しいです…！」

喜びと興奮で、頬が上気しているのがわかる。私にとつて、ここは天国だ。

「…ふん」

鼻を鳴らして、元就様は部屋から出て行つてしまわれた。お忙しい方なので、お仕事を片付けに行かれたのだろう。元就様があ仕事をされているというのに、私などが書物を読んでいてよいのだろうか。

「ああ…まだ見ぬ書物が、私を呼んでいる…！」

しかし、思いとは裏腹に、ふらふらと棚に近づいていく私なのであつた…。

「…………」

(何なのだ、あの娘は!?)

あれしきの量の書物で、ああも喜ぶとは…。

『ありがとうございます元就様!…とても嬉しいです!』

小菊の声が、上氣した頬が、潤んだ瞳が…頭から、離れぬ。

「…………」

(我は、一体どうしたのだ！？)

落ち着けと、己に言い聞かせる。常に、冷静でおらねば…。

計算通り。我のこの動搖以外は、計算通りなのだ。

小菊は、喜んだ。それでよい。

我は、喜ぶ小菊を見て…嬉し、かつた。

「 … よいのだろうか…」

我が、他人の感情に振り回されることなど、あつてよいはずがない。解つておるのに。

それなのに、己の胸にあるものは、何なのだ！？

申し子と薔薇の花（後書き）

…私の作品、つまらないでしょうか？駄作でしょうか？もひとつ、ヤグとか入れたほうがいいのでしょうか？何気ない生活風景とかも、入れたほうがいいでしょうか？…なんて、全部意見を求めるようではダメですね。やつぱり、自分で考えないと…

たとえ、どなたも読んでくださいなくとも、投稿はしますよ私！…姉や妹に尋ねたら、投稿して数日で感想を求めるなど叱られました。そうでしょうけど、不安なんですよ…。

今回も読んで下さった方、ありがとうございます…。こりゃしゃいますか？

薬酒と匂と闇（前書き）

感想いただきました！やつたああああああああ！です！返信させ
ていただきましたが、この行為はネット上では失礼にあたるのでし
ょうか？もしそうならば、ごめんなさい。

これから、元就様が暴走されます。公式のあの方とは、ほとんど
別人です。ですが、公式でお相手はいないので、ひょっと
したらこうなる可能性もなきしにもあらずです！…ないでしょ？
大丈夫！…という方、どうぞ！

「嗚呼…幸せ、です…」

夕餉、湯浴みを済ませた私は、うつとりと呟いた。自室の窓から降り注ぐ、柔らかな月光を浴びながら、（はあ…あんなにもたくさんの書物が読み放題なんて…！明日は歌集を読ませていただきましょう…あ、でも、物語も読みたいです…）などと、本のことばかり考えていた。

「…あなた、聞いてあるのか？」

（ずつと、読んでいたいところですが…蠅燭がもつたいないですからね。私は、我儘なんて言つてはいけません。迷惑をかけないようになないと…）

物思い（九割が本、一割が元就様への感謝の思い）に耽っていると、誰かに肩を掴まれた。

「きやあ…むぐっ！？」

びっくりして悲鳴を上げかけた口を、手で塞がれる。

「…声を上げるでない。誤解されると面倒ゆえ」

この、感情のこもつていらないお声は…。

「わかつたか？」

部屋に明かりがないため、黒い影にしか見えない方に、頷いてみせる。

「…よし」

ぱっと、手を離される。

「元就様？いつから、いらっしゃっていたのですか？」

影と向き合う。私は月に照らされているが、元就様は闇の中だ。もちろん、表情などわかるはずもない。

「先程から声をかけておったが…そなた、気が付かなかつたのか？」

淡淡と、言葉が部屋に響く。

「…」めんなさい。考え方をしていたので…」

失礼ですむことじやない。一国の主を無視するなんて、殺されたつて文句は言えない。

「…まあよいわ…ところでそなた、酒は飲めるか？」

ちやほんと、水音がした。どうやら、瓶を持っておられたらしい。「えつと…飲んだことがないので…わからないです」

正直に答える。すると、

「そうか…我が作った薬酒ぞ。特別に飲ませてやる」

杯を渡される。…断ることなど、できそうにな。

「案ずるな、強い酒ではない」

畏れ多くも、元就様に注いでいただいた。漂う、お酒の匂い…。

「ありがとうございます…では、いただきます」

意を決し、朱塗りの杯に口づける。

(～～～～～～～～！～～～～！)

喉が、焼ける。薬草の強い苦味と、微かな甘味。

「…どうだ? 口こ、合ひつか?」

期待されているのが、わかる。元就様が、少しでも感情を表してくださったのは嬉しいが、これは…。

(…無理! これは無理ですう! 喉がひりひりしています!)

初めて飲んだお酒は、とても『美味しい』と言えるような味ではなかつた。薬を飲んだような、ひどい気分。

でも、元就様が、こんな夜更けにわざわざ持参してくださつたと思つと…。

「美味しいですよ。ちょっと、苦いですけど」

どうしてだらうか。嬉しくて、喉の痛みも忘れてしまえる。

「…当然よ。我が作った薬酒ぞ?」

暗闇の中。見えない元就様が笑まれたような、そんな気がした…。

昨夜、小菊の元を訪れて、我的手製の薬酒を酌み交わした。

頬をうつすらと赤く染め、小さな白い手で杯を持ち、月光の下で座す白衣姿の小菊には、眞間の可愛らしさとはまったく別の、女と

しての艶やかさがあつた。

筆を止め、己が手を見る。… 昨夜、我的「」の手は、何をしようとしていた？

抱き寄せ、ようじと。酒瓶も杯も投げ捨てて、小菊を抱き寄せようと、しておつた。

我のものに。あの娘を、我のものにしようとして… とどまつた。あの時の我が持てる理性を総動員して、伸ばしかけた手を止めた。それは、小菊を想つてのことではなかつた。

怖くなつたのだ。我が意のままに小菊を抱いた、その後が。拒絶を。向けられるであろう、失望と怯えの目を。嫌だ。そんな目で、見られるのは。小菊の心から、我がいなくなるのは。

我は、我の「」としか考えていなかつた。そんな己が、何より腹立たしかつた。

「…小菊」

「こんな我を、そなたは嫌うだらうか？」

薬酒と呑み闇（後書き）

リアリティーを追求したいのですが、性別だけはどうもつままりません。こればかりは、生物学やら心理学やら、難しい本を読んで調べるしかなさそうです。…男性に質問できるひとでもないですね。

ああ…時間だけが、足りない…。

読んで下さった方、ありがとうございました！

鬼の疑惑～毛利元就は幼女趣味なのか？～（前書き）

サブタイトルからお分かりになられるでしょうが、今回はアーニキ視点です。長身、白髪、隻眼の三拍子。田立つこと間違いなしのアーニキが、元就様に悟られず安芸の国に入ることなんてできないだろとう突っ込みには、いつもお答えします…変装してつたんだよ！多分！

注意すべき点としましては、アーニキの過去が『姫』です。アーニキに姫若子なんて過去はねえといつ私の妹のような方は、お気を付けください。
では、どうぞ！

鬼の疑惑 ～毛利元就は幼女趣味なのか？～

「…毛利の野郎、ああゆうのが好みだったのか！」

城下町。危険を冒してまで、やつてきた安芸の国。

茶屋で、うまそうに団子を頬張っているのが、野郎共からの報告にあつた『毛利の女』だ。

ずいぶんちつちえな。俺の腹ぐらいまでしかねえんじゃねえか？あ、でもやっぱ、かわいい顔してんな。お人形みてえだ。

それにもしても…駄目だ。想像できねえ。色々と。

勘定を払つて、女…てえか、娘は、歩き始めた。特に目当てがあるわけじやねえのか、並び立つ店に入ろうとはせずに、歩いている。行き交う人々を、活気ある町を、娘は楽しそうに見ている。

「…あ。絡まれてやがる」

「…三人の男が、娘の行く手を塞いだ。戸惑う娘の手を掴んで、どこかに引っ張つていこうとする。

大人しいのか、怯えて声が出せないのか。娘は黙つたまま、連れ去られちまいそうだつた。

俺は舌打ちして、通りの陰に目をやる。…何の為に、てめえらがいんだよ？

「仕方ねえな…」

動こうとしない毛利の部下に代わつて、こゝは俺が出てやるぜ。感謝しろよ、毛利元就？

俺の外見は、『目立つ』。髪は白くて、左目には眼帯。背は高く、海で鍛えられた筋力は伊達じやねえ…おつと、独眼竜の台詞盗つちました。

ま、とにかく、野郎が何人かかつてこようが、俺の敵じやねえつてことだ。

「大丈夫か？」

数秒で連中を沈めて、訊く。

「は、はい！助けていただいて、ありがとうございます！」
礼を言われて、悪い気はしねえ。毛利の女だから、「助けてなん
て、言つてないわ！」とか言つたかと思ったが、礼儀正しい娘みて
だ。

…ちつちえな。ほんと。

姫若子と呼ばれていた時代。女装（よく女の子に間違われたもん
だ）してお人形で遊んでいた俺は、今では男の中の男だが…。

「…？…子供扱いしないでください…」

実は結構、かわいいもんが好きだ。

娘の頭を撫でながら、俺は思った。

（…はあ、かわいいなあこいつ…毛利にやあ、もつたいねえ…）
髪はさらさらで、さわり心地がいい。

「あの…この方たち…」

氣絶して地面に転がっている連中に、娘が目を向ける。

「大丈夫でしょうか…？お医者様を、呼ばなくとも…」

…ほんとに、毛利の女なのか？あの冷徹野郎の？

「ほつときや、いざれ目え覚ますぞ」

力は加減しておいた。怪我もしてねえはずだ。

すつと、娘が動いた。連中の一人の横に屈んで…。

「…ううん。お、重い…」

腕を引っ張り始めた。何してんだ？

「あんた、何を…」

娘が、振り向く。

「このままにしておいたら、踏まれてしましますから…」

また、挑戦する。びくともしない。

それでも、娘はあきらめずに、何度も何度も挑戦する。

…ほんと、何なんだ？こいつ…。

「本当にありがとうございました！助けていただいたうえ、お手を

煩わせてしまつて……」

娘の細腕では、大の男を移動させるなんて真似は到底不可能。結局、俺が手を貸した。

いいで! よ。 気にすんな

俺の武器である碇槍の重さに比べれば、軽いもんだ。

「あ、まだお名前を伺つていませんでしたね。私は小菊と申します」

本名を名乗るわけにはいかない

あー！幼少が狂おうつたー！

「弥三郎さん！お礼といつてはなんですが、よろしかったらあそこ

のお茶屋さんで一服してほせんか?」

あ、たゞ少しもせずは譲りでくる小菊

羨ましいぜ、毛利元就。

攫われそうになつた私を助けてくださつた方は、弥三郎さんといつて、どこか普通の人と違つていた。

髪は絶麗な白色で 左耳は金帯を巻き とても背の高い方だ。た

「おまえ、おまえの身を守るために、おまえが死んでしまった方がいい。」

「弥二郎さん、甘いものは好きですか？」

「ん？…好きってほどじやねえが、嫌いってほどでもねえな」

「ああ。毎でのんびり釣りでもしたくなぬ湯風だな」

釣りですか？私は、読書がしたくなります」

あんた 級一だ?十三ぐらいか?

「アーリー・エイジ/アーリー・エイジ」

「おへりですか?... 美味しいと思こますよ? 健康にもよれんつですか?」

ゆつたりと流れる時間。とりとめのない会話。

(…平和ですねえ)

お茶とお団子が、美味しい。

「…あんた、人形みたいでかわいいな」

また、頭を撫でられる。

「子ども扱いしないでくださいってば！」

…そんなに、子供っぽいのだろうか？父上も、屋敷の皆も、私のことを『お人形』のようでかわいいと、よく言つてくれていたが。弥三郎さんの大きな手を、なんとか払いのける。すると。

がしつ。

「え？」

「な、ちょっと付き合つてくれねえか！？」

澄んだ海のように青い瞳を輝かせ、私の両手を握る弥三郎さん。

「つ、付き合つって、何を…」

「悪いよつにはしねえ！行こいつぜー！」

爽やかな笑顔を浮かべる弥三郎さん。

…知らない者についていってはならぬと、元就様に言われているのですが…。

(弥三郎さん、優しいお人ですし：大丈夫ですよね)

鬼の疑惑～毛利元就は幼女趣味なのか?～（後書き）

アニキは身長約190?。元就様は身長約170?。小菊ちゃんの身長は140～150?です。アニキの肩に元就様の頭が届くか届かないくらいです。小菊ちゃんは、アニキのお腹辺り、元就様の胸辺りに頭がくるくらいの身長です。：ちっちゃいですね。お二人の身長は、公式サイトを調べたのですがわかりませんでした。なので、勝手に決めてしまいました。すみません。

お読みになつてくださいった方、ありがとうございました！

着物と人形（前書き）

今まで投稿した作品を読み直して気が付いたことが一つ。…短い！短すぎる！一話が非常に短い！…区切りを、もっと長くしたほうがいいのでしょうか。

金欠のイメージがあるアーティストですが、領主ですからこれぐらいの金子は持ち合わせています。

着物と人形

『政務を終わらせ、我は独りで待つておる。

『よいか？知らぬ者についていつてはならぬぞ？田輪が沈む前には戻るのだぞ？』

城下町の様子を見てみたいと言つ小菊の外出を、許可したのはよいが…。

『…そなたは非力なのだから、騒動などに首を突っ込んではならぬぞ？』

やはり、ついていけばよかつた。供はいらぬと小菊は申したが、そういうわけにもいかぬ。

『…小菊が無事城に戻るよう、しつかり見張つておれ。…傷一つあれば、解つておろうな？』

配下を二、三人つけておいた。それでも、安心できぬ。

あんなにも愛らしく無垢な娘を、世の男達が放つておくとは思えぬ。…もし、あの娘に触れる者あらば…。

輪刀。我の、武器。

「…切り刻んでくれる」

日輪はまだ天高く、我を照らしておる。

「小菊、早く戻らぬか…」

そなたがおらねば、政務も鍛錬も読書も食事も、何一つ気がそぞろになつてしまつのだ。

ああ。…やつべえ、楽しい。

紅珊瑚の玉簪、白地に桜の花模様の着物、朱色の帯、黒漆に赤い鼻緒の履物…結構高くついたが、これだけ完璧に着こなしてくれりやあ満足だ。

「ど、どうですか…？似合つています？」

ぐるりと、その場で一回転する人形…ではなく、小菊。

「ああもうかわいいぜ！」

ぐりぐりと頭を撫でてやりたい衝動を、なんとか抑える。せつか
く結わえた髪が、乱れてしまつ。

芸術だな。これはもう、芸術の域だ。

「そ、そうですか？…」じついう格好したの初めてですけど、喜んで
いただけたようでおかつたです」「…

…微笑むな！心臓にわりい！

「年頃の娘なんだから、そういうふうに着飾つてみろよ。…好きな
やつに見せてやれば、きっと大喜びすんぜ？？」

毛利とか毛利とか毛利とかな！あの野郎に見せてやりてえ！

「好きな方、ですか…？」

一瞬きょとんとしていた小菊の頬が、いつすら赤くなる。

「お、いんのか？好きなやつ」

茶化すように言つと、

「ち、違います！好きとか、そういうのじゃ…！」

茹躊みてえに真っ赤になつて、俯いちました。

…毛利に、マジで殺意が湧いたぜ…！

「元就様、ただいま戻りましたーお団子買つてきましたから、よろ
しかつたら召し上がってください」

差し出された包みを、受け取る。田は、小菊に釘付けだ。

「…そなた、そのような着物を持つておつたか？」

着物だけではない。簪も。

「あ…町で知り合つた方に、買つていただいたのですが…。へ、変
ですか…？」

我と小菊の身長差。自然、小菊は我を見上げる形になる。

「いや…よく、似合つておる」

なぜ、我はこんなときでも無表情なのか…。まつたく、嫌になる。
笑つて「かわいらしき」と、言つともできぬ。

「ありがとうござります」

にこりと微笑む小菊は、可憐な花のようで…。
うかつに、触れられぬ。壊してしまっては、取り返しがつかぬ。

着物と人形（後書き）

投稿を失敗し、落ち込んでいたのですが、何とか投稿できました！パソコンの機嫌が悪かったのでしょうか？

視点がころころ変わりますが、どうかご容赦ください。：読みにくいでしうが。

お読みください、ありがとうございました！

菊の花と、露（前書き）

…この小説は、人物の感情の動きが中心となつておりますので、展開が非常に速いです。…はい、言い訳です。ただ単に、私が未熟なだけです。…悔しい！と感じております。この思いをバネに、上達を目指しますぞ元就様あああああ！！

今回から、1話の内容が長くなります。それに伴い、視点も笑つてしまふくらい変わります。…平に、『容赦を…。

菊の花と、露

…嬉しかった。弥三郎さんに褒められるのは、少し違っていた。

「何ででしょうか？」

自問して、答えがかえつてくるはずもない。

『好きなやつ』

弥三郎さんに言われて、真っ先に思い浮かんだのは…元就様、だつた。

（好き？私は…あの方のことを、好いてる？）

わからない。わからない。

父上は好き。屋敷の皆も好き。高松城の方達も好き。弥三郎さんも好き。

じゃあ…元就様は？

手の中にある、紅珊瑚の玉簪を見つめる。青白い月の光を反射する、紅い珊瑚。

『よく、似合つてゐる』

あの方の、無感情な声が反芻される。

どうして？どうして、こんなに気になるの？

会いたい。小菊に。

同じ城、同じ屋根の下にあるといふのに、おかしな話だ。

…いや、そもそも我が、他人と共にいたいと思つこと血体おかしいのか。

人の心。情。

いらぬ。そのようなもの。

それなのに、傍にいてほしいと望む。…我に、心あるゆえに。

捨て去つたと、思つていた。この氷の面を手にした、その時に。

『…苦しいわ』

燭台の火が、揺れる。頼りないその光が、まるで今の我のようだ、

苛立つ。

あつてはならない。解つてある。
…解つて、おるのだ…。

夢を見た。悲しい夢。

母上が、亡くなつた日の夢。

大好きだつた。私を、命を懸けて愛してくれた、世界で一番立派な女性。

そして、父上が生涯で、唯一愛した女性。

…私が、殺してしまつた女性。

元就様。どこにいらっしゃるのだろうか。

会いたい。今すぐ!。

湧き上がつてくる想い。あの方の隣にいれば安心と、安心できる。でも、

「…駄目。駄目駄目駄目駄目駄目…」

襖にかけた手を止める。

押さえつける。あの方に、ご迷惑をかけてしまつ。

甘えてはいけない。駄目なのだ。

私は、独りでいなくてはいけないのだ。

「…つうう…」

声を殺して、私は泣き始めた。

我の朝は、早い。

日が昇る前に起床し、身支度を整える。そして、闇を払い世界を照らす日輪が昇るのを、手を合わせて拝む。

今日も素晴らしい御来光。願うのは、毛利の繁栄と、安芸の平和。これからも変わることのない、我的願い。

『…笑つて、くださいませんか?』

小菊の願いは、そんなささやかなものだった。日輪の加護と、我

の日々の尽力で叶えられている我の願いに比べれば、あまりにちつぽけな願い。

小菊には、欲というものが無い。周囲の人間が、幸せでいてくれたらと望んでいる。

それは偽善などではなく、あの娘の心根がそうさせているのだろう。

「…我は、違う。我は、我の願いの為ならば、すべての者を犠牲にする。駒も、民も、我すらも。」

小菊。そなたとて、例外ではない。例外など、ありはしない。

「…そなうぬよう、手は尽くすが。」

「…日輪よ。小菊にも…。あの、何も知らぬ無垢な娘にも、どうか加護を…」

願いが、増えてしまった。

まだ、眠つておるだろ？

小菊の部屋。政務を始める前に、小菊の顔が見たくなつたのだ。それはまあ、いいのだが…。

襖にかけた手を止めて、我は逡巡した。

眠つておるならば、声などかけたところで無意味。だが仮に、召し替えでもしておつたなら、断りなく入ることなどすべきではない。

「…小菊？ 入るぞ？」

返事は…あつた。

「…も、元就様？…だ、ダメです！…ぜつたい、ダメです！」

駄目。絶対。小菊にしては珍しい、強い口調だつた。

「…気になるではないか！」

「わかった。しばし待つゆえ、早く着替えよ。」

待つのは好きではないが、仕方ない。

「…きが…ちが、…う…」

途切れがちに、小菊がそう言った。

(…着替えは、違う?)

「ならばなぜ、入つてはならぬのだ？」

様子が、おかしい。声がやけに小さく、べべもつている。

「ダメ…です…入っちゃ、ダメ…」

「泣いて、おる…のか？」

狼狽える。私は、何か小菊を悲しませるようなことでも、してしまったのだろうか？

「…小菊、そなた、泣いておるのか？」

我が発する声は、それでもいつも通り。

「……………はー」

肯定。

「なぜ、だ？…我のせいか？」

小菊が高松城にやつてきて、早数週間。恩人であり、我を恐れることなく接するこの娘が、快適に過ごすことができるよう配慮してきた。その、はずだつた。

城の者達は、小菊を幼子のように可愛がっている。菓子を渡すところも、何度も見てている。

小菊も、城の者達を好いておると、言つておつた。それならば、原因は、我にあるとしか思えぬ。

返答はなく、押し殺したような嗚咽が、かすかに聞こえてくる。襖一枚。我と小菊を隔てる物は、あまりにも薄く、かつ厚かった。

「……………」

入るなと言う。入らないで、ほしいと。

この場合の、最善は？小菊の言葉を無視して部屋に入るか、落ち着くまで独りでござせるのか…。

どうすれば、よいのだ？涙も凍りついた我には、どちらがよいのかわからぬ。接し方など…。

『我慢しなくても、いいんだよ』

脳裏に響いた声。これは、

『泣きたいなら、泣いていいよ。私は力になれないけど、隣にいることぐらいはできるから…ね？』

供とはぐれ、道に迷い、辺りが暗くなつていいくとき、出会つた我より幼い女子。涙など見せられぬと、気を張つていた我に、優しく語りかけてきた。

結局、我は泣いた。自分より年が上の我が泣くのを、女子は呆れることも嘲いもせず、言葉どおり、ただ隣にいた。

光と熱を失つた世界で、寄り添う女子の体温は、とてもあたたかかった。

憶えてある。はつきりと。

何も言わず、何も聞かず、ただ傍にいるだけ。それが、どれだけありがたかったか。

： そうだ。我は、誰より知つておつた。

孤独を。独り泣く、寂しさを。

： 小菊を、独りにはすまい。

この身体。まだ、冷え切つてはおらぬはずだ。
今度は、我が隣におりつ。

菊の花と、露（後書き）

元就様の捨て駒である私（自称捨て駒）は、斬り捨てられても文句は言えない失態をしてしまいました…。戦国BASARA『宴』に付与されている投票権を巡り、アニキ派の妹との激しいバトルの末、敗れてしましました…！待ち受け欲しかったです…！

このようなつまらない後書きまで読んで下さった方、ありがとうございました！

涙の理由～幸福とは～（前書き）

…もう、言い訳すら思つておません。このよつたな超急展開の小説に付き合つて下さる方、本当にありがとうございます…どうにかして、手直しなくては…！でも、時間が…！

…時間といえば、映画で半兵衛出来ませんでしたね。いや、映りはしましたけど、秀吉メインで小っちゃく映つてただけでした。台詞なしです。…予想はしてました。後書きで、映画のネタバレしますので、まだ観ていない方は読まないほうがよろしいかと思います。

涙の理由～幸福とは～

部屋の隅。膝を抱えて泣く、小菊の姿。

「……小菊」

隣に座る。

「……つも、もと、なつとも……」

大きな漆黒の瞳から、流れ落ちる透明な雪。頬を濡らし、着物を濡らし、畳を濡らすそれは、途切れることがない。

「……わ、わた……わたし、は……」

「よい。何も言うな」

言わなくてもいい。謝らなくていい。

「好きに泣け。我も、好きでここに……あなたの隣にいる。迷惑などと考える必要はない」

ああ。こんな口調では、伝わらぬな。

「……我慢など、せずともよい」

少し、躊躇しながらも、頭を撫でる。言葉で伝えられぬなり、態度で示そうぞ。

「つもとなりやまつ……」

「……？」

抱きついてきた。小菊が。

そうして、幼子のように、声を上げて泣き出した。

私は、黙つて小菊の傍に、本当に傍に、いる。

立場はあの時と逆だが、感じる温もりは変わらぬのだなと、田を細めた。

泣いた。声を抑えもせずに、感情のまま泣いた。

こんな風に泣けたのは、何時以来だろう。

悲しい。苦しい。そういう感情すべて。

ずっとずっと、吐き出したかった。でも、できなかつた。ずっと、

我慢していた。

誰の前でも、泣いたりしないよう。泣く資格なんて、私にはなかつたから。

けれど、今、私は泣いている。

好きに泣け。迷惑などと、考える必要はない。我慢など、せずともよい。

そんなふうに言つてもらえたのは、初めてだつた。
泣いているだけの私。お忙しいはずなのに、の方は傍にいてくれる。

そして、優しく頭を撫でてくれた。

堰が、切れた。

泣いていると、寒かつた。独りでいたせいだろう。
耐えられなくて、優しい手の持ち主にしがみついた。とても、あたたかかった。

そのまま、涙が枯れるまで、泣き続けた。

言葉通り、の方ははずつと、隣にいてくれた。

…私が、母上を殺したのです。私を生んで母上は体調を崩され、床から起き上がるこさえできなくなりました。

…その頃の私は、自分が原因だと知らなかつたのですから、季節の花や小動物、綺麗な石など、外で手に入るものを母上にお見せしていました。母上は喜んで、私のことを褒めてくれました。

大好きだと、愛していると、やせ細った身体で私を抱きしめてくれた母上のことを、私は今でも憶えています。

…母上が亡くなつたのは、五つのときでした。私はよひやく、母上が私を生んだせいで亡くなつたのだと知りました。

でも、誰も私を責めないのです。それどころか、私に悪くないと言つのです。そして、私が幸せになることが母上への供養になるのだから、幸せになりなさいと言つのです。

…どうやって、幸せになればいいのですか?私には、わかりませ

んでした。

母上が生きていた頃、何も知らない私は幸せでした。母上の健康と笑顔を願い、そのために行動しました。母上が笑うと、父上も屋敷のみんなも笑つて、私も笑いました。

母上が亡くなり、私は外に出なくなりました。出で、することがなくなつてしまつたのですから。

私はずっと泣いていました。そんな私を見て、父上や屋敷のみんなが辛そうな顔をするのです。…泣いてはいけないと、思いました。辛い顔なんて、見たくなかつたから。

人前で泣くのをやめようと決めました。涙を止めて笑うのには、苦労しましたが。

私が、母上を奪つたのです。みんなに愛されていた母上を。私はその罪に、やつと気が付きました。

…苦しかつたです。誰も私を責めずに、私の幸せを望むのです。みんなから幸せを奪つた、私に。

せめて、私にできるのは、みんなの望むとおり幸せになることなのでしょうか。私の幸せは、みんなが幸せでいてくれることです。…そのためには、泣くことなんて、絶対にできなかつたのです…。私が泣くと、みんなを不幸にしてしまいますから。でも、泣くのを我慢するのは、なかなかに辛いものです。

今日、母上が亡くなつた日の夢を見ました。悲しくなつて、元就様にお会いしようと思つたのですが、何とか思いどまりました。お会いしたら、涙を我慢できなくなりそうでしたから。だから、部屋で、独りで泣きました。

まさか、元就様がいらつしやるとは思いませんでした。…いえ？嬉しかつたですよ？けれど、やっぱり涙が止まらなかつたので…。え？よかつた？何がです、元就様？

これは安堵、だらうか。

幸せにならなくてはならない。他者の幸せが己の幸せである。そ

のために、他者に甘えられない、迷惑などかけられない。
涙など、絶対に見せられない。

なんとも、小菊らしい。

我がなにかしたのではないかと思い悩んだのが、馬鹿みたいではないか。

「…そなた、我の思つた以上に変わった娘だ」

「…？」

抱きついていた小菊が、顔を上げる。泣き腫らした目は赤く、しかしすつきりとした表情だった。

「そなたの心根は、我の考えが至らぬほど真っ直ぐだったのだな」

「…？」

首を傾げる小菊。その背に腕を回し、我は呟く。

「…だからこそ、惹かれたのやもしれぬな…」

「え…？」

我の言葉の意味を理解する前に、抱き寄せ、呟きを漏らしたその口を塞ぐ。

我の、口で。

口付けされたのは、生まれてはじめてで。

しかも、お相手は元就様で。

私の思考は、止まつた。

数瞬が、永遠に感じられた。

「…抵抗するなり、応えるなりすればよいのに…そなた、そんなことではほかの男に襲われるぞ？」

にいと、間近で浮かべられる笑み。

あ、そんな表情初めてみました。嬉しいです。…ではなくつて…！

「もつ！元就様！？今、今、何を…！？」

今頃になつて、顔が赤くなる。

「…何を、とは？我がそなたに口付けた。それだけのことよ」

（それだけ！？元就様からすれば戯れなのでしょうが、私にとつて

は…！）

無表情に戻った元就様のお顔が、心なしか曇る。

「嫌であったか？ 我では」

「…………嫌じゃなかつたです。でも、その…………初めて、だつたので

…」

（ああもう… 嫌じゃないけど、恥ずかしいのです…！）

こんなこと、言わせないでほしい…。羞恥心で俯く私に、投げられたとんでもないお言葉。

「…ならば、こいつの初めでか？」

「…！」

押し倒される。わざきまでの体勢も、冷静になつてみれば大問題だが、これは拙い。

それはもう、とんでもない状況だ。

（こいつの？え？何をされるおつもりですか？）

…決まっている。この体勢で、男の方と女の方がする」となんて、ひとつしかない。

のしかかってくる元就様の口の端が、少し吊り上つている。

「小菊… 覚悟は、よいか？」

（よくないです…本当に、よくないです…）

思つても、身体は金縛り状態で、動くことはおろか声すら出せない。（誰か！誰でもいいのでどうか助けてください…）

毛利の御家を守るが、我が使命。家を絶やさぬ為に、子を為すのも我が使命。

これまで、どこかの領主の娘でも嫁にもうえようと思つておつた。他勢力との結びつきと、後継ぎが得られればどんな女でもよい。

だが、今の我に、そんな選択肢はない。

小菊と。この娘以外の女など、考えられぬ。

…だから、やきほど申したであらうへ抵抗か、順応かと。
安心するがよい。口付け程度で動じる生娘に、無理強いはせぬ。

…今日のところ、だがな。

涙の理由～幸福とは～（後書き）

映画のブルーレイを購入しました。観ました。…絶叫しましたよ、
まどろみは。もうね、大興奮です。「三成いいいいいいいい！」
もう可愛いすぎるだろおおおおおお！？」「刑部うううううううう
！死ぬな！死ぬんじゃない！」「元就様ああああああああああああ
素敵ですうううううううううう！」「浅井夫婦来たあ！ああもう観ら
れてよかつたあ！」「…あれ？瀬戸内は信長戦に参加しないの？」
「…悔いなどないよ！観られて幸せでしたあ！」

…気持ち悪い…つるまあ、そつじょううね。しかし滾った！

BARAで恋愛ケーブル出ないかな…予約して貰いはいきますよ！全国のBARAファンが発狂しますね、間違いない。妄想しただけで死にそうになりますから、ボイスで確実に死にます。

三國志ノ研究

…おとろみ猫の、こんな不らない後書きで何でもかんでもぐだぐだせつた方、ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4170z/>

天に輝く日輪の如く

2011年12月21日13時55分発行